



TITLE:

静脩 Vol. 26 No. 3 (1990.3) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 26 No. 3 (1990.3) [全文]. 静脩 1990, 26(3)

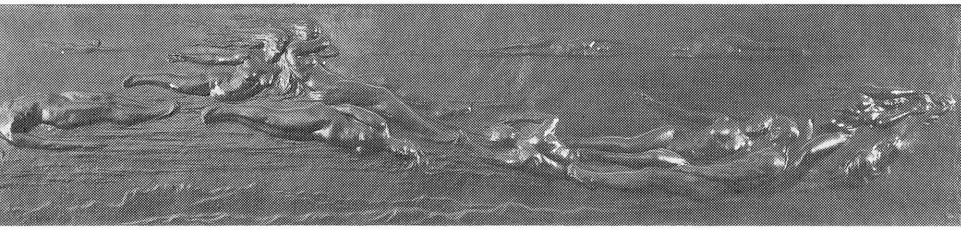
ISSUE DATE:

1990-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65996>

RIGHT:



静脩

1990年 3月

Vol.26, No.3

The Kyoto University Library Bulletin

読んだり、見たり、聴いたり

教養部教授 新 田 博 衛

本は自宅で読む。図書館では読まない。研究室もむかしは持っていたが、“紛争”のころ、“占拠”しにくる学生をいちいち追っ払うのが面倒になって、返上してしまった。いまは教室の一部になっている。

読む本の種類は、美学・藝術学という研究分野からして、雑多にならざるをえない。講義や演習の必要に迫られて、カントの哲学、アルベルティの絵画論、ストラヴィンスキーの音楽論、孫過庭の書論などを、いちどに平行して読み進めながら、ノートを作らねばならなかったりする。これはこれで楽しい作業だが、ほんとうは他人の書いた本などにあまり頼りたくはないのである。ごく少数の選び抜かれた古典的なテキスト。それだけを置いた簡素な書齋をときどき夢みることがある。鉄アレイで筋肉を鍛えるように、古典テキストで頭を鍛え、強靱になった思考力で美や藝術の現象にぶち当たれたらどんなにいいだろう、と。これは、むろん、はかない夢にすぎなくて、机の上はいつも雑然としている。

本は自宅へ持ち帰れるし、必要ならコピーも取れる。しかし、絵や彫刻となるとそうはゆかない。美術品には生身の人間と似たところがあり、写真

ないし図版では大事なものが抜け落ちてしまう。そこで、好きになれそうな作品と会うのを楽しみに、美術館や展覧会場へ足を運ぶことになる。

藝術作品は、もともと好きとか嫌いとかの対象であって、研究の資料などではないはずである。ところが、近代の科学主義はこの趣味の領分へも容赦なく侵入してきて、歴史学の一分科をそこに押し立ててしまった。美術館の中をぶらぶら歩いて、気に入った絵に足を止める。ひと目で惹かれないような絵の前は通り過ぎる。こんな楽しみ方を、やや後ろめたく感じさせる何かが、整備された美術館にはある。様式別、年代順、作者別に分類された作品が、傑作も凡作も等しなみに、ずらりと陳列されている。年表に落ちがあってはならないように、いやしくも美術史の進展を見せるのに遺漏があってはならぬ、とでも言いたげで、勤勉な鑑賞者は疲れてしまうだろう。凡作まで見る義務はまったく無いし、傑作には、分類の枠などなんの役にも立たないはずである。美術館を美術史資料館にしてしまうのが学問なら、学問とはずいぶん詰まらない物ではないのか。

音楽では事情がやや複雑になる。楽譜、生演奏、そしてテープ・レコード。これらのどれを作品と

見なせばよいのか？ 絵や彫刻なら、これが作品だ、と指さすことができるが、例えばモーツァルトのイ長調ピアノソナタ、K・331とは何をさして言うのか。トルコ行進曲つきのこのソナタには無数といってよいほどの名盤があり、みな、それぞれに違っている。相違は、むろん、意図的かつ野心的なのだから、フリードリヒ・ゲルダを採ればイングリット・ヘブラーは落ちるだろうし、その逆も成り立つ。楽譜が作品なのか？ 5本の線とお玉杓子を組合せたグラフに指令力を持たせる習慣は、西欧近代の音楽に特有の物にすぎないけれども、この習慣が“演奏の自由”を生んだ。邦楽のような音楽では、演奏の技巧と作曲の工夫とがいわば癒着していて、名人上手が弾き唄わねば、作品そのものの姿が毀れてしまう。これに対して、ピアノの初心者の方がたよりない指使いで弾いても、譜面の指令に違反していないかぎり、それはK・331の《イ長調ソナタ》である。“演奏の自由”とは、下手に弾くのを作品から許されている、というに等しく、そんなことが許されるのも、あれこれの生演奏を越えたところに厳然と指令的グラフが横たわっていればこそである。といって、モーツァルトの《イ長調ソナタ》はこれだと、楽譜を指さしておいて済むのかどうか。音楽作品は、や


はり、鳴り響く音の流れそのものをさすのでなければなるまい。ところが、ほかならぬその音の流れが、下手は下手なりに、上手は上手なりに、そして上手であればあるほど意図的に、千差万別なのである。こうして、話は振り出しへ戻ってしまう。

名ピアニストたちの演奏の違いは、作品についての理念の違いと考えるよりほかはない。これこそ《イ長調ソナタ》だと信じる音の流れに、彼らは一回ごとのステージを賭けている。鳴り響く音に即して立ち現われる理念。耳の感覚をたえず裏打ちしていながら、じっさいには聞こえてこない理想の音。カントの美学がやや当惑ぎみに「直感的理念」と名付けたこの奇妙な存在を、われわれ聴衆も耳に棲み着かせている。演奏会場で、再生装置の前で、われわれは耳に聞こえぬ音に照らして鳴り響く音に聴き入っているわけである。そうでなければ、どうして演奏の善し悪しをあげつらうことなど出来ようか。

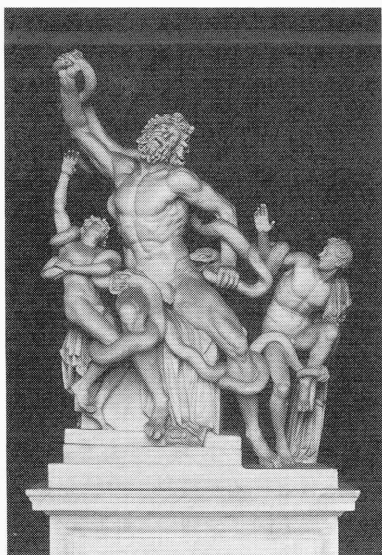
ふつうの図書館にじっくり収まるのは楽譜だろう。印刷されており、本の形になっている。哲学や文藝のテキストが版によって少しずつ違っているのは周知の事実だが、この点では楽譜も例外でない。ベートーヴェンの『熱情』ソナタ。第1楽

(1)

(2)

章第10—13小節を手もとの2つの版で比べてみると¹⁾、強弱の指定、スタッカート付け方に異同がある。テキストの校訂に“解釈”が入り込むのは文字も音符も変わらないから、譜面づらの違いは『熱情』についての感じ方、考え方の違いを映しているはずである²⁾。各小節の左手のパートに出てくる  という形は、あきらかに第5交響曲の冒頭を想わせるのであって、強弱・スタッカートは、そうすると「運命が戸を叩く」ときの叩き方を指定している、ということになる。譜例(1)のノックは単調で機械的である。3遍とも、同じ強さでトントンやっていて、「だんだんゆっくりめに」(*poco ritardando*)というテンポの指定とうまく噛み合っていない。この点で譜例

(模刻)

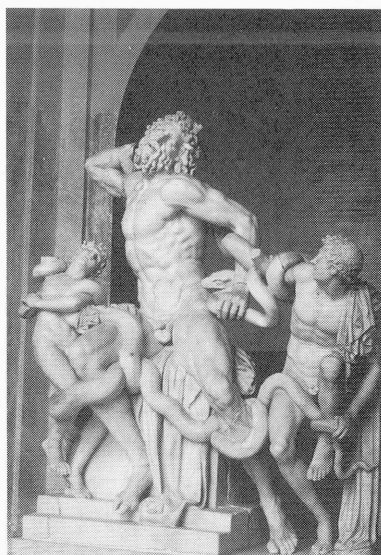


だかと挙げた腕は、レッシング『ラオーコオン』の教科書の図版などでおなじみの物だが、やはり、群像全体の纏まりを弱めているように思われる³⁾。欠損した彫刻は、元の姿にたいする想像力を掻き立てるから、かえって精緻な鑑賞を誘い出す筈が多い。われわれは、目に見えぬ形に照らして、目前の大理石の塊を眺めていることになる。そうでなければ、どうして後世の補修の適不適を実感したり出来るだろうか。

(2)は行き届いている。ノックは「きわめて弱く」(*pp*)始まり、「だんだんゆっくりめ」になるにつれて、軽かった叩き方がしだいに重くなる。第10小節で4分音符にまで付けられていたスタッカート記号が、第12小節では消え、第13小節になると、3箇の8分音符からもそれは無くなってしまふ。

自分の研究室は持っていないけれども、この3月末日まで、教養部A号館の部長室を使うことが許されているので、壁に数枚、彫刻の写真を掛けている。そのうちの1枚が、今はたまたま『ラオーコオン群像』(右図)である。ヴァチカン宮内の同じ回廊に並んで置かれている模刻(左図)と見比べるとおもしろい。父親の右腕。蛇を掴んで高

(原像)



「直感的理念」なるものは、どうやら、われわれの耳にも目にもしっかり棲み着いているらしい。M・メルロ＝ポンティの言い方では「肉に結びついた理念」、「感覚的なものと対立するのではなく、その裏地であり奥行であるような理念」⁴⁾。美的感覚においてとくに目立つこの奇妙な存在に気付いた最初の人、プラトンだった。人間の柔らかい肉、ヘラクレイトス的に流動してやまない感覚が、バルメニデス的な不動のアイデアを宿しうるのはな

ぜか、と。「美について」という副題を持つ対話篇『大ヒッピアス』は「美（カラ）は難問（カレパ）だ」で結ばれるが、この「難問」を解くために、プラトンはアイデア論という大包围網を張らねばならなかった。西欧近代のカントは、ニュートン力学の機械論的説明を受け容れる自然が、同時に美しい自然としても立ち現われることに感銘し

て、プラトンとやや似た地点にまで達した。科学的認識の上滑りを嗤う犀利な現象学的哲学者にとっても、「肉に結びついた理念」の存在は「最大の難関」⁵⁾だった。厄介事（カレパ）に手を出す覚悟なしには、いまなお美（カラ）を論じることが出来ないようである。

注

1) 上段の譜は井口基成編集・校訂の春秋社版『ベートーヴェン集2』（1982）から、下段の譜はHrsg.vom Beethoven - Archiv Bonn, Beethoven Werke Abt. VIII · Bd. 3, *Klaviersonaten* II, G. Henle Verl. München (1976) から採った。

2) これには、むろん、ベートーヴェンの自筆稿、写譜、初版譜、当時のピアノフォルテの機能とその演奏法などの諸問題が絡んでくるが、ここは、それらに触れる場所ではない。実証的音楽史学の仕事については、児島新『ベートーヴェン研究』、春秋社（1985）が、現場の生きいきした空気を伝えてくれる。同書の「ベートーヴェン自筆稿のファクシミリとその意義」（157-175頁）は、図書館関係者の傾聴に価する提案であろう。

3) A.フルトヴェングラー & H. L. ウルリヒス、『ギリシア・ロマの彫刻』、澤柳大五郎訳、岩波書店（1956）、185-191頁参照。美術考古学者の仕事にも、藝術的直観の閃きが不可欠なことが分っておもしろい。なお、この群像についても、ゲーテは模範的な美術鑑賞体験の記述を残している。『ゲーテ年鑑』第18巻（日本ゲーテ協会、1976）、195-215頁にすぐれた紹介論文、芦津丈夫「ゲーテとラオコオン群像」がある。

4) と5) M. メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの』、滝浦・木田訳、みすず書房（1989）、206頁。

史料に見る湯川先生と税務署

基礎物理学研究所教授 牧 二 郎 ^{*1}
大阪医科大学教授 河 辺 六 男 ^{*1}

基礎物理学研究所分館こと通称白川学舎の名をご記憶の向きは、本学も最ヴェテランのうちに数えられることであろう。この左京区北白川小倉町50番地の227所在の木骨造瓦葺二階建は元来湯川記念財団の所有であったが、後に京都大学に寄贈された。現在この敷地には鉄筋四階建の基研数理解析研共同利用宿舎が建ち、逆に財団事務室が間借りしている。

そもそも白川学舎開館披露があったのは、湯川記念財団設立の計画が漸く緒についたころおい、1955年（昭和30年）5月20日（金）午後3時である。建物視察の後、財団設立世話人で寄贈者の下中弥三郎平凡社社長、同じく世話人湯浅佑一湯浅電池社

長、滝川、鳥養・現、元総長（当時）、そして湯川先生の各挨拶があった〔YHAL Z01 061 M01〕^{*2}。湯川記念財団はその目的とするところを、「理論物理学を主体とする基礎科学の研究を援助促進し、その進歩発展を図り、もって世界文化に貢献する」とうたっているが（財団寄付行為第3条）、直截には、当時創設されたばかりの共同利用研究所、基礎物理学研究所の事業推進の財政的バック・アップを意図した。白川学舎は財団設立呼掛け当初に寄付された物件で、研究所本館の狭隘を補い、且宿舎の機能を兼ねた。財団設立の基金活動において、ノーベル賞金からの300万円の拠出と並ぶ金看板であった。

*1 湯川記念館史料室委員

*2 湯川記念館史料室（Yukawa Hall Archival Library）文書番号。

寄贈に際し平凡社側は、免税措置の観点から、「建物は平凡社の寄附といふが、手続きとしては現金を財団設立世話人に一旦寄附して、世話人会の方で購入してトウキをする」ことを希望した〔Z01 060 M01 : 長谷川万吉→湯川秀樹1955年3月18日付書簡〕。事はそのように運ばれた。登記は1955年3月31日、左京区下鴨神殿町18番地在住湯川秀樹名義である。北白川小倉町78坪の土地が70万2千四百円、日本間3万洋室7室建坪述69坪の木造二階建が241万8千9百円の時代であった〔Z01 010 M01〕。

この高名の物理学者の「取得した」物件に、左京府税事務所が不動産取得税4万7千40円を賦課したのは同年6月16日付である。納税書を一瞥して湯川先生は眼鏡を額にズリ上げ、「や、や、や、……」と奇声を発せられたにちがいない。そして即刻信頼する五島道信基研事務主任（当時）に電話されたであろう。7月19日付で提出された「不動産取得税異議申立書」〔Z01 062 M01〕は、専ら当該物件が学術研究に供されることを強調し、その所有権は現在設立準備中の湯川記念財団に帰属することになるもので、湯川秀樹名義の登記は、財団設立世話人会の一世話人による、将来の移管手続きを顧慮した中間的なステップにすぎず、依って湯川個人への課税は免んぜられるべき、と主張する。

だが、10月13日全く同じ税額の「決定通知書」を送付される〔Z01 063 M01〕。〔別紙事由〕に従えば、地方税法第73条の4に基づく不動産所得税の減税は、「不動産所得の時期と法人設立の時期とが最近において確実に行なわれる」ことを条件とし、これを「不動産所得時における不動産の使用状況において認定」とする、という。一読した湯川先生は笑みは苦く、口許はかすかに歪んでいたことであろう。この時期、財団設立の見通しは未だそれほど明るくはなかったからである。6月3日丸の内工業倶楽部大食道での設立準備会に出席した百三十社に協力を求め、醸金依頼状発送は、7月、9月、10月付の3回に及んでいるが〔Z01 070, 110, 140, 150, M01〕、寄付金収入合計は8月15日現在426万、Rockefeller 財団から

5千ドル（180万円）入金が目途がやっとなつたに過ぎない〔Z01 120, 134, M01〕。一年前に始まった仁科記念財団の募金の方も、目標額3千万円に対し、申込は2千万円に達せず、募金期間の延長と財団設立の時期の繰り延べが云々される有様である〔Z01 260 M03〕。取得税免税の事例を、「今日に至るも未だ設立されていないものに対して適用することは出来ない」とするも致方あるまい歟と。

翌1956年、3月26日付で清瀬一郎文部大臣に提出された「財団法人湯川記念財団設立許可申請書」〔Z01 010 M01〕には、上記土地建物の寄付申込書を、貼付の登記簿本とともに見ることができる。申込書は湯川秀樹より財団成立代表者鳥養利三郎宛である。

湯川記念館史料室（1979年8月1日発足）は、こんな挿話も潜む、この国の素粒子物理学の誕生と進展に関する一次資料（湯川秀樹自筆原稿・計算・講義ノート・研究室日誌・研究会記録・等々）69ケース（45×40×30cm 段ボール箱）、2千冊の湯川蔵書、2百冊の湯川著作（何等かの湯川の寄与を所載する単行本）、それらを収納展示する湯川記念室（1985年2月6日開設）から成る。記念室は湯川先生在任時（1953-70）の基研所長室である。資料の整理が20%にも達しないのは汗顔の至りであるが、既整理分は“YHAL Resources : Hideki Yukawa (1), (2), (3)”にまとめられて、請に応ずる。各資料は、その出所・種別・資料群内の順序を示す9個の文字によって分類される。その梗概を付表にご覧いただきたい。

科学技術史料（scientific archives）の収集・保存の気運は、この国の近代科学の成熟に対する一指標であろう。湯川記念館史料室もわが国の物理学漸く百年の産である。同じく創立百年を迎える本学でも同様な事態に面し始めている。米国物理学会物理学史センター刊の手引書のいう通り、一人の科学者に係わる資料は、その人が最も密接であった研究機関に保管できれば最上であろう。研究環境についての情報への接近・蓄積も可能となるからである。この精神からすれば、当初の資

料整理には、その分野の専門家の協力を必須とするが、編集された文書群の管理は逐次当該教室・研究所図書室に移されてゆくべきであろう。そして図書館中央を通じてそういった情報に容易にアクセスできることが望ましい。だがこの過程はなま易しいものではなかろう。各資料の特質に相應する独特の分類形式がそれぞれ発明・採用されるにちがいないし、それでなければ整理は進まない。さらに科学技術史料に実験装置・機器の原形も含めると、図書館だけではまかないきれず、学部博物館の新設あるいは学外の施設の協力を待たねばなるまい。しかもなお、それらを情報センターとしての図書館に統括する構想が練られねばならぬのである。

[参考文献]

1) 『湯川記念資料館史料室私記』(素粒子論研究 65 / 4 (1982), 223 - 237); “The Yukawa Hall Archival Library, Kyoto ” (Proc. US-Japan Collab. Workshops on the History of Particle Physicsin Japan (YHAL. 1988), 237 - 241).

2) 『物理学史料調査等特別委員会報告』(日本物理学会, 1984年 2 月); “ Scientific Source Materials : A Note on their Preservation ” (AIP, Center of History of Physics, 1977); “ Preserving Computer-Related Source Materis ” (AFIPS, 1979).

3) 実験装置保存の一例として、J. H. Bryant : “Heinrich Hertz, The Beginning of Microwaves ” (IE EE, 1988).

YHAL Classification Scheme

We use nine letters and figures in total as the code number :

SOURCES OF MATERIALS	ORDER OF MATERIALS	KINDS OF MATERIALS
E Envelopes	0 1 0	A manuscripts of Articles
F Files	0 2 0	B manuscripts of Books
N Notebooks	0 3 0	C Correspondence
Z Fragments & others		D laboratory Diaries
.	.	E manuscripts of Essays
.	.	L Lecture notes
.	.	M Miscellaneous
		N Reports to the occupation forces
		P manuscripts of scientific Papers*
		R proceedings of Research meetings
		T manuscripts for Talks
		U manuscripts of Unpublished articles
		X Records of university affairs.

[*The ' Papers ' are numbered as they are in "Hideki Yukawa Scientific Works ",
Part I (Iwanami-shoten, Publishers, Tokyo, 1979).]

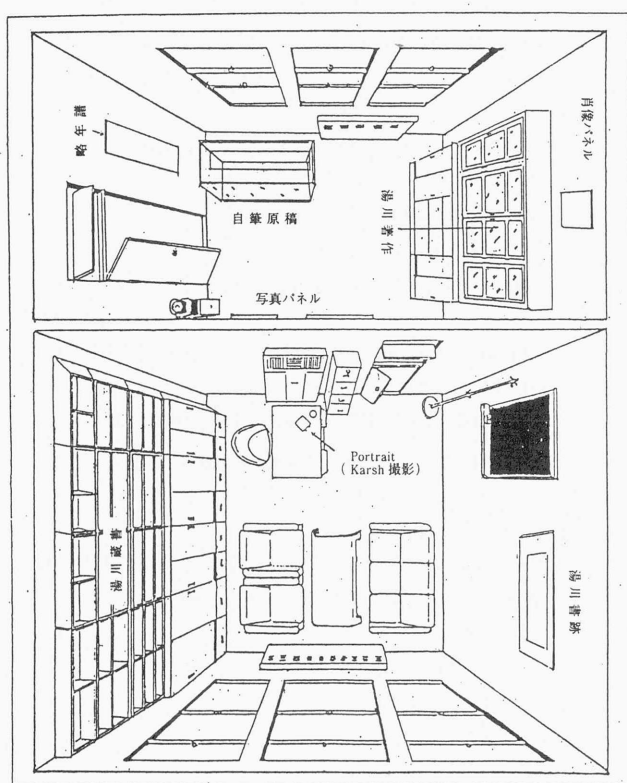
We adopt the following code numbers for materials which are edited by the
Committee for YHAL:

E	D	T	0	1	0	Selected materials on particular subjects, which are compiled by the Committee for YHAL. Pictorial materials: photographs, sketches, video-tapes, etc. Oral materials : recorded audio-tapes of addresses, lectures, and symposia.
P	C	T				
A	D	T				

YHAL Resources : Hideki Yukawa (I) [Soryushiron Kenkyu 65 (1982), 239–269]		
Source	Kind	Title
E01	P01	Interaction of El. Particles I , 1934
E02	P12	On the Interaction of Elementary Particles II , 1937
E03	P13	On the Interaction of Elementary Particles III
E04	P14	On the Interaction of Elementary Particles IV , March 15 1938
E05	U01	[Problems on the Intra-Nuclear electron, c1933]
E06	U02	A Consistent Theory of Nuclear Force and β -disintegration
F01		[Manuscripts for Symposia and Colloquia, 1934–35]
F02		[Manuscripts of papers, 1934]
F03		[Manuscripts of papers, 1935]
F04		[Manuscripts of papers, 1936]
EDT	010	[Record of Colloquia on Theoretical Physics, Osaka Imperial University, 1938]
EDT	020	Development of Meson Theory in Japan, 1940–45
EDT	030	Two Meson Theory
PCT	010	Hideki Yukawa 1907–1981 (16 panels of 60cm \times 120cm)
YHAL Resources : Hideki Yukawa (II) [Soryushiron Kenkyu 70 (1985), 269–306]		
E08	U04	Positron Theory
E15	T25	[Manuscripts for Talks in the 1939 Annual Meeting of PMSJ]
F05		[Manuscripts for Talks in Symposia, 1936–]
EDT	040	Nonlocal Fields and H. Y. in receiving the Nobel Prize
YHAL Resources : Hideki Yukawa (III) [Soryushiron Kenkyu 77 (July 1988), 161–202]		
E09	P09	On the Nuclear Transformation with the Absorption of the Orbital Electron, Feb.18,1937

E10	P15	The Mass and the Life Time of the Mesotron, March 1939
E11	P17	Absorption of Slow Mesotrons in Matter, Yukawa, Okayama, 1939
E12	A01	[A Review of Heisenberg's paper: <i>Ueber den Bau der Atomkerne</i>]
E13	A04	[Recent Researches on the Cosmic Ray, July 1937 (in Japanese)]
E14	A13	[Recent Progress in Physics, 1941 (in Japanese)]
E16	U05	On the Theory of the New Particle in Cosmic Ray
E17	P07	Note on Dirac's Generalized Wave Equations
F08		[Memoranda]
F15		[Problems investigating at Present, 1942]
F16		[Manuscripts for Talks on the Theory of Elementary Particles, 1942-43]
F50	X01	[Physics Department, Kyoto University (1)]
F51	X02	[Physics Department, Kyoto University (2)]
EDT	050	Hideki Yukawa in 1939 Tour to Europe and U. S. A.
EDT	060	Distribution of Heisenberg's 2nd Paper on the S-Matrix in Japan
PCT	020	Exhibit on Hideki Yukawa and Meson Theory (26 panels of size 53cm × 42cm)

湯川記念室 (1985年2月6日開設)



附属図書館90年忘れ残りの記

法学部整理掛長 廣 庭 基 介

京大の図書館のように長い歴史をもった図書館になると、蔵書にしても、建物にしても、歴代の職員のことにしても、隅から隅まで分からない所は1箇所もなく、すべて白日のもとでの如く分かっている、というような訳にはいかないものである。またそのような図書館に私のように何十年も勤めていると、館の正史に載らなかった歴史の残滓のような事項を自分でも知らぬ内に記憶の引出しに収めているものでもある。その引出しの中から一つ二つ、今の内に述べておくべきと思われることを紹介させて頂きたい。なお私の記録よりも詳細に御存知の方がおられたら、是非御教示頂くようお願いする。

1) もう一人の図書館長代理のこと。

京都大学が昭和54年から発行を始めた「京都大学歴代職員録」において、或いは、附属図書館が昭和36年に刊行して我が国最初の国立大学図書館史となった「京都大学附属図書館六十年史」においても、歴代館長の任免期日を見ると、本庄栄治郎第5代館長（昭和14. 1. 17～同17. 7. 28）と沢潟久孝第6代館長（昭和17. 9. 1～同22. 5. 31）の間に34日間の空白期間があることになっている。丁度同じ頃、司書官にも交替があって、昭和17年8月22日付けで竹林熊彦第7代司書官が辞任し、同日付けで長崎太郎が第8代司書官に就任している。上記の34日間の館長の空白期間に、昭和17年7月27日付けで、附属図書館長事務取扱を命じられた教授が実在している。それは、当時文学部長在任中であつた成瀬清（号：無極）教授であつた。9月10日には館長事務取扱の任を解かれているが、その成瀬が館長室で執務中にそこを訪問した富永牧太天理図書館長は、天理大学図書館研究室年報「芸亭」（ウンテイと読みゲイテイとは読まないことは図書館史を学んだ者には御馴染み）第12号（1972年夏）の巻頭随想「竹林先生のこと」の中で、次のように語っている。

「それが何の用件だったか記憶にないが、後にまた京大図書館をたずねていた。新館長は、縁のない畑から来られた人で、もちろん知らぬ人だが、一時、代理の椅子についているということであつた。話しているうちに、この人は遠い親戚にあたるものの知り合いということがわかり、意外に話はばたばたとくだけて行った。

『竹林さんはどうしましたか？』

単刀直入にたずねてみた。館長は苦笑をかくしきれずに

『ヤメましたよ……あの人の単刀直入は、京都人の館長には通用しませんヨネ』（後略）

この引用文の中で富永に「一時、代理の椅子についている……」と云つたのが前出の成瀬館長代理であつたことは間違いない。ただ、少々不可解なことは、富永の「新館長は縁のない畑から来た人で、もちろん知らぬ人だが」と説明している点である。何故ならば、富永は昭和3年に京大文学部（独文専攻）を卒業した人であるが、一方の成瀬は明治40年東京帝大文科大学（独文専攻）を出て、明治41年第三高等学校のドイツ語の教授となり、同時に京大文科大学でも独文の講師を嘱託され、大正8年には三高から文学部助教授に転じ、昭和5年文学博士となり、独文の教授に昇任した人だからである。富永が成瀬を知らなかったという事は、成瀬が小説家・随筆家としても既に大正時代から名を顯わしていただに一層信じられない気がする。尤も「縁のない畑」という言葉は、富永と縁のない畑という意味ではなく、成瀬（独文）と本庄前館長（日本経済史）の関係を云つたものか、富永が同じ独文出でも卒業後はキリシタン版等の書誌学研究者となつていたので、それと独文との関係を云つたものかも知れないが、それにしても、「知らぬ人……」というのが不思議である。

さて、富永は「一時、代理」の新館長に竹林司書官の現況を尋ねているのであり、館長は竹林が

辞任したと答えているのであるから、これは本庄館長が7月28日に辞任し、成瀬が館長事務取扱に任ぜられ、8月22日に竹林が辞任した後、9月1日から沢潟が新館長に補されるまでの8日間の或る日のことということになる。天理図書館長としての富永は、新村館長が羽田館長に交代した時以来、京大の図書館長が交代する度に表敬の挨拶に訪問するのを恒例としていた、とこの文章の前の方で述べている。

今、「京都大学歴代職員録」や、附属図書館自身が第3代目の新館屋竣工に際して作成したアートペーパー、カラー刷りのパンフレットなどに「歴代館長」の名前と任免月日が列記されているのを見ると、第9代田中周友館長（昭和32年7月15日～同38年7月14日）と第10代堀江保蔵館長（昭和38年7月25日～同41年7月24日）の間の僅か11日間の空白期間に足利惇氏文学部長が館長事務取扱に任命されているのを見るが、それならば1カ月余も同じ職にあった成瀬文学部長も当然本庄、沢潟両館長の間にその名を記録されるべきだと思う次第である。又この際お願いしておきたいことは、「京都大学歴代職員録」に高等官であった歴代の司書官を記載して頂きたいということである。今では司書官という官職があったことを記憶する人も少なくなったが、司書官は明治41年の官制改革で設置されて、昭和22年に事務長制に代わるまでは、図書系職員のトップの職制として、京大では9人の人々が就任していたのである。

2) 京都大学における第一号司書は誰か？

京大の図書館は明治32年12月11日に開館し、即日利用を開始、同館はその日を開館記念日としている。一方、京都大学の開学はそれより2年半も遡る明治30年6月18日となっていることは周知の通りである。ところで、図書館が開館するためには、開館以前に相当数の図書を備え付け、一定数の館員も任用し、館の建築も終わっていなければならないことは当然のことである。京大附属図書館にもそのような開館前史があった。京大開設から僅か1カ月後の明治30年7月14日、まだ図書館の建物も館長も決まっていなかった時に、将来司

書となる予定ではあったが、座る席がないので、本部庶務課に勤務することを命じられた笹岡民次郎こそ第1号の図書館員である。今までこの人と、明治32年5月10日に着任した秋間玖琢の2人については、帝国図書館から呼び寄せられたように記述されたものがあったが、それは間違いで、この2人は京大に来る直前に帝国図書館に勤務していたのではなく、もっと以前に、帝国図書館が未だ東京図書館と呼ばれていた時代にその館員であった履歴をもっていたというのが真相である。

笹岡は、明治3年東京に生まれ、下谷小学を卒業したが、家の事情でもあったのか正規の中学校には学ばず、私塾や個人教師について英語を学んだ。個人教師の中には、後にプリンストン大学の教授となったヒントンという人や、夏目漱石の友人山川信次郎、東北大学金属研究所を創設し、文化勲章を受けた本多光太郎博士の実兄の本多浅次郎などがあり、正規の学校出ではなかったが、その語学力は相当なレベルであつたらしく、後のことになるが、明治38年に京大最初の「本学欧文一覧」を作製した際に、その編纂を担当した勉勵賞として60円の賞与を与えられている。さて、笹岡は明治22年、東京図書館に雇として最初の就職をし、同27年東京美術学校に配置換えされ、そこで文庫掛を創設している。同29年7月、仙台の第二高等学校へ出向を命じられ、同9月には書記（判任官）に昇格されたが、どういう訳が翌10月29日付けで免職となっている。そして約半年の後の明治30年7月14日付けで新たに京大へ書記として就職したのであった。

当時の京大は未だ理工科大学の開校に向けて鋭意準備中の段階であり、図書館の建物は勿論その敷地も決まっていなかったし、事務局の職員も総長以下全部で10人位いしかいない状態であった。そのような大学自体の草創期中で、笹岡は本下総長の命を受けて、全国の蔵書家・愛書家・著述家などに宛てて、将来一般市民に公開を計画している京大図書館の為に図書を寄贈するよう依頼状を作製する仕事を手始めに、「図書寄贈手続」、「寄贈図書受領書」、「京都帝国大学図書借受仮規則」などの立案にとりかかったのであった。以後昭和

11年9月までの39年間、主として洋書目録の専門家として勤務し、多くの司書を育て、京都大学附属図書館の目録の名を全国に知らせる基礎を築いた事績は記憶される必要がある。笹岡は又、書誌学者としても当時の幾つかの雑誌に論文を発表し、自ら稀覯書の蒐集に励み、時には図書館主催の展覧会に蔵書を出品したり、蒐集をめぐる新村館長と意見を戦わせたこともあった。新村は随筆の中で、笹岡を「竹世坊」と仇名して触れている。司書官にまでは昇り得なかったが、最後には高等

官の待遇に列して退職した。残念ながら、事務職員の職場における履歴の把握は、本人の在職中に限られており、笹岡についても退職後のことは一切わからない。住所も死亡時期も墓所も私は知る術を持っていない。笹岡の一の弟子であった文学部図書室主任の谷口寛一郎司書が生前私に、「笹岡さんの死後、その蔵書が河原町今出川上ルの古本屋竹山善書堂へ売りに出されたそうだよ、案に相違してよい本はなかったということだった」と話されたことがあるのみである。

京都大学図書目録作成の電算化にあたって

はじめに

本学が学術情報センター（National Center for Science Information System 以下、NCと略す）に図書の目録情報の登録を始めて足かけ4年が経過した。平成2年1月末現在、本学のNC登録データ数は、書誌約7万件、所蔵約11万件である。

ところで、昨年から今年にかけて、附属図書館の電算機のリプレイスが行われ、それにともない、ほぼ全ての部局に目録用端末が配置された。これにより、本学における目録作成の電算化がさらに前進することになる。目録作成の電算化が新しい段階を迎えようとしている今、改めて本学の目録体系について概観し、目録検索、目録作成の一助としたい。

I. 総合目録の現状

現在の目録作成の概要を図1に示した。

本学の目録作成は、現在、カードによる作成（手書きあるいはタイプ）と電算機を使ったオンライン目録作成の2方法により行われている。図からもわかるように、

- ① 受入れ図書のすべてをオンライン目録作成している部局
- ② 受入れ図書の一部をオンライン目録作成し、

それ以外は目録カードを作成している部局

- ③ 受入れ図書のすべてについて目録カードを作成している部局

と、部局により様々な状況にある。オンライン目録作成によりデータベース化された図書については、目録カードを全学総合目録（カード目録）に排列していないが、各部局で作成された目録カードは附属図書館に送付され、附属図書館が編集・加工し全学総合目録（カード目録）に排列している。従って、総合目録は、カード目録とオンライン目録（近畿北部地区国立大学目録データベース）により構成されていることになる。

II. オンライン目録

1. オンライン目録システムの概要

学内の図書館・室の目録用端末から附属図書館の電算機を経由してNCの目録システム（NAC S I S - C A T）^{*1}に接続して、目録情報の登録（以下入力と称す）をする。NCに入力されたデータは、一時的に附属図書館のデータファイルに取り込まれ、その日の夜、近畿北部地区国立大学目録データベース（以下、近畿北部地区目録データベースと略す）に登録され、翌日、検索可能となる。又、必要があれば、カード、図書の背ラベル、

目録作成の概要

平成2年1月現在

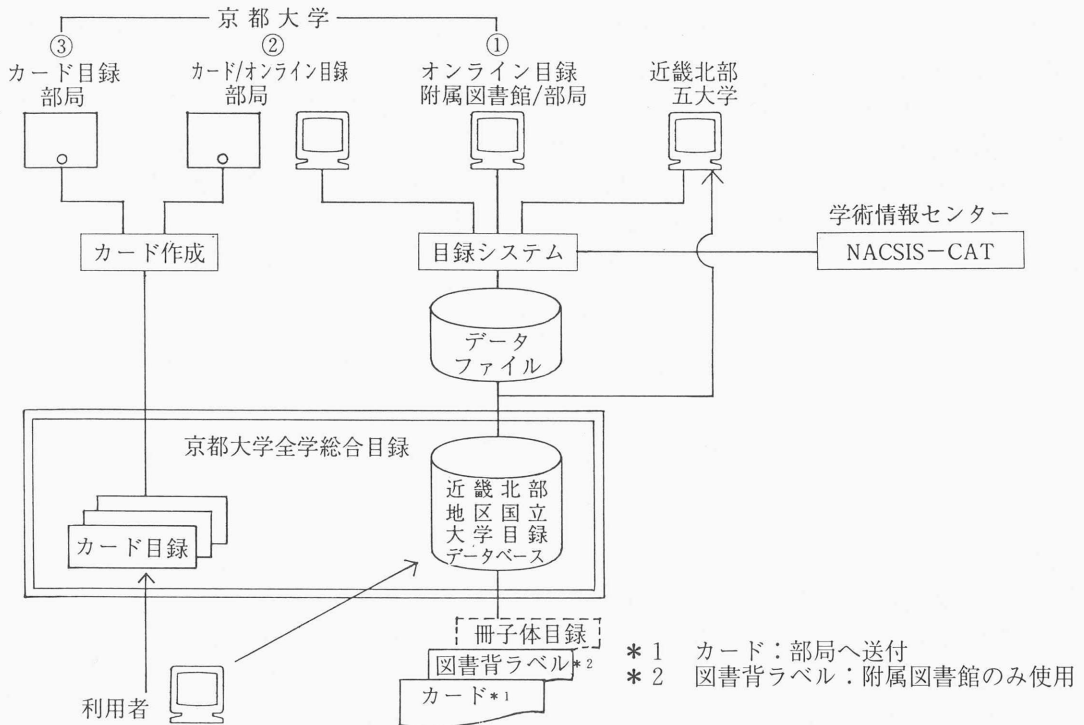


図1

冊子体目録の出力が可能である。冊子体目録については、現在、より使い易い目録を目指してプログラムを開発中である。なお、目録システムの詳細については、「静脩」Vol. 24, No. 3（1988. 1）を参照されたい。

2. オンライン目録作成

オンライン目録がカード目録と大きく異なる点は、「オンライン分担目録方式によって総合目録データベースを形成するためのものであり」*²といわれるように、全国の接続図書館がNCで保有する書誌情報を共有し、「分担」して目録作成を行うところにある。

附属図書館が接続した当初はわずか4大学であった接続館も平成2年1月現在は112大学となり、NCのデータ量もそれにともない増大している。

目録の分担作成の意図は十分実現され、入力には既に入力されている書誌をチェックし、修正した後、所蔵情報を追加するのが大半である。しかし、「分担」して目録作成するのであるから、入力に際しては当然種々の「約束」に従い、また、常にNCの仕様変更などに留意する必要がある。

入力に際して特に留意していることは、重複書誌を作らない、不用意な修正・削除はしない（自館に不要なデータでも他館が必要であることがある。）等である。又、チェックリストによる入力後の点検は必ず行い、書誌情報の品質管理に努めている。なお、品質の管理に関しては、入力者個人のチェック、担当者間相互チェックに加えて、場合によっては、他大学から指摘を受けることもある。また、重複書誌を一つにまとめる処理などは、NCが、独自の調査結果と各接続大学からの

報告にもとづいて行う。この処理に伴う所蔵情報の修正については、NCから該当の接続館に依頼がある。

NCの仕様の改善・変更については、「オンライン・システム・ニュースレター」（隔月刊）により通知されるので、通覧する必要がある。

3. 書誌・所蔵データベース構築状況

オンライン目録作成により蓄積されたデータは、下記の通りである。近畿北部地区国立大学目録データベースは、本学のほか、近畿北部の五大学（京都工芸繊維大学、滋賀医科大学、滋賀大学、奈良教育大学、京都教育大学）を含む。

近畿北部地区国立大学目録データベース

平成2年1月末現在

	書 誌			所 蔵		
	和 書*	洋 書	合 計	和 書*	洋 書	合 計
京 都 大 学	30,442	42,028	72,470	47,807	62,715	110,522
近畿北部6大学	58,075	53,146	111,221	106,613	80,686	187,299

* 和書については、上記の外、閲覧業務用に入力されたデータがある。

（6大学全体で、書誌約13万件、所蔵約18万件）

NACSIS-CAT システムデータベース（接続大学112大学）

平成2年1月25日現在

書 誌				所 蔵		
和 書	洋 書	洋書遡及	合 計	和 書	洋 書	合 計
329,395	374,499	293,617	997,511	1,313,487	1,166,051	2,479,538

4. オンライン目録検索

（1）利用者用端末からの検索

附属図書館では利用者用端末を平成2年1月より6台に増設した。設置場所も、利用の便を考慮してメインカウンター前、インフォメーションカウンター横の2カ所とした。利用者は、この6台の端末を使って近畿北部地区目録データベースを検索できる。検索方法については端末備え付けのマニュアルを参照されたい。

（2）研究室等の端末からの検索

近畿北部地区目録データベースを各研究室から検索するには、京都大学統合情報通信システム（KUINS）^{*3}を経由することになるが、現在、一部プログラムを修正中であり、近く公開へ向けて準備を進めている。

学術情報センター情報検索サービス（NACSIS-IR）^{*4}は、研究者の学術研究、図書館にお

ける参考調査活動の支援を目的としているが、提供されているデータベースの一つに「目録所在情報データベース」（図書・雑誌）がある。データの内容は、NACSIS-CATとほぼ同じである。このデータベースは利用者の申請により有料で利用できる。（1セッション30円）詳細は、「静脩」Vol. 24, No. 1～3（1987. 10, 1988. 1）「情報検索サービスの手引」（学術情報センター、昭和62年4月）を参照されたい。

（3）目録用端末からの検索（各図書館・室に配置）

目録用端末からは、近畿北部地区目録データベース、NACSIS-CATの検索が可能である。附属図書館では、参考調査、相互利用等のための検索にも利用している。

おわりに

附属図書館が入力を開始した当初は、NCのシ

システムも流動的であり、また、附属図書館の目録システムのトラブルもなにかと多く、さらに、機械に対するある種の恐怖心もあり、まごつくことが多かった。しかし、最近はNCのシステムも安定し、マニュアルも整備され掛員の慣れともあいまって、入力は一掃に行われている。

さて、京都大学全部局の目録の電算化にむけて図書館主催の講習会が2月中旬から順次開催されている。これは、先行館である附属図書館が、部局の目録の電算化がスムーズにすすめられるようサポートする目的で開くものである。新たに入力を始める職員の方々は、不安も大きいだろう。しかし、「習うより慣れろ」という言葉があり、これは、入力についてもあてはまる。この講習会で概略をつかんだら、マニュアルを手にもまず端末の前に座ることをおすすめしたい。附属図書館の目録担当者も、実際に入力しながらマニュアルを再読し、目録規則を確認する等を繰り返す中で、しだいに入力に慣れていった。

今後、カード目録がオンライン目録に順次移行し、加えて、本学創立以来蓄積されてきたカード目録のデータベース化が実施されれば、データベースは確実に充実していく。一方、本学のオンライン目録検索のレスポンスタイムの向上にむけて、

DBMS^{*5}の改善の計画もすすめられているので、データ内容、検索システムともに向上が期待される。このような状況の中で、全国大学図書館目録電算化システムが利用者にとってさらに有用なものになるよう、我々図書館員は努力したいものである。

最後に、人づてではあるが、ある大学の小さな図書室の職員の声を紹介して本稿を終わる。「一人でカード目録を作っていた時は、常に、これでいいのか、間違っていないかと不安にかられることが多かった。でもNCのシステムで目録を作成するようになってからは、全国の仲間と共同で作っているということが支えになり、不安はなくなった。」

- * 1 NAtional Center for Science Information
 System—CATaloging service
- * 2 「目録システム利用マニュアル データベース編」(学術情報センター、昭和62年12月)
- * 3 Kyoto University Integrated information
 Network System
- * 4 NAtional Ceter for Science Information
 System—Information Retrieval service
- * 5 Date Base Management System

図書館業務電子計算機の更新について(概報)

昭和59年度(昭和60年1月)附属図書館に、汎用の中型コンピュータ導入の経費が予算化されて5年が経過しましたが、この年末年始にかけてこのコンピュータの機器更新が行われました。

附属図書館に最初に導入されたコンピュータは、昭和59年4月の新館開館とともに稼働し始めた、図書の貸出返却業務を処理するシステムで、いわゆるオフィスコンピュータといわれるものです。その後、中型コンピュータが導入されたわけですが、これによって、その他の受入業務や目録業務

などのシステム化が実現されました。現在では、利用者は直接目録データベースを検索(オンライン目録検索)することも可能となり、図書館におけるコンピュータの利用はすっかり定着しました。

とくに目録システムは、全国の大学図書館が共同して、目録データを学術情報センターのデータベースに登録し利用するシステムが完成していき、急速に進展してきました。今では、100を超える大学の400万件以上の目録データが図書館端末で検索出来るようになっています。

今回の機器更新では、おもにハードウェア面に重点をおいて、コンピュータの処理能力や容量を約2倍、端末の台数を約4倍に増強し、また、ソフトウェア面では学部や研究所などの教室・研究室に既に設置されている端末（TSS端末）から学内の目録データを、利用者が直接検索利用できるシステムを導入する計画です。

すでに館内の利用者が目録検索するための端末も、2台から6台に増設されて毎日フル稼働しています。その目録データを作成するための端末は、学内の学部や研究所の図書館（室）に50台以上設置しました。今まで端末が少なく、目録データの作成が思うように出来なかった問題は、これでひとまず解消されることになります。これからは、目録システム利用のための研修を受けた職員が順次目録データの作成に従事し、全学の受入図書ほとんどが目録データベースに入力されることに

なります。

また、本図書館のコンピュータには、本学を含めて近畿北部3県（滋賀、京都、奈良）の国立7大学のうち6大学の目録データが入力されており、地域目録データベースを保有する、全国でも特徴あるシステムとなっています。これは、急増する図書や雑誌の文献情報の分担収集や相互利用の基礎となるもので、今後大学図書館が、高度化・多様化する利用者の情報要求に応じて行くための大きな手段の一つになります。

これからは、更新後のシステムの安定運用と質的向上、これまでにカード化されている目録のデータベース化などに向けて、システムの開発・運用を図るとともに、つぎの機器更新をめざしたシステムの評価と見直し、市場調査などが大きな課題となります。

学内 LAN（KUINS）完成と図書検索デモ

本学では、昭和62年度より学内の情報通信を円滑に行うためLAN（Local Area Network）の建設を進めて来ましたが、去る2月20日、3年間に渡る第一期工事の完成を祝賀して記念式典が開催されました。

名称を京都大学統合情報通信システム（Kyoto University Integrated Information System）、略称を英文名の頭文字を取ってKUINSといいます。KUINSでは、コンピュータなどのデータ通信はもとより電話、ファクシミリ、画像などマルチメディアの通信が可能となるよう設計されており、近い将来実現されるISDN（Integrated Services Digital Network）にも対応できるようになっています。

式典には、学内外から150名ほどの来賓、関係者が参列し、またKUINSを利用した様々なシステムのデモンストレーションや機器の展示が行われました。本部地区と宇治地区でテレビ会議システムを使った遠隔講義の実演や、ひとつのワー

クステーションから複数のホストコンピュータへの同時アクセスの紹介、デジタル電話の展示など内容も多岐にわたり、これからのKUINSがどのように学内で利用されて行くのかが一目で分かるようになっています。

附属図書館では、会場に設置された図書館端末からKUINS、図書館用コンピュータを経由して学術情報センターに接続し、全国の大学図書館の所蔵する図書や雑誌の目録データベースを検索して、利用者の探したい文献がどの図書館にあるかを調査する業務を紹介しました。これまでの図書館の目録カードと違ってキーワード、出版社などの項目から探したり、複数の項目を同時に指定して条件を絞った検索ができることから、これからの図書館にとって重要な機能の一つとなるものです。

今後、大学図書館としても目録システムだけでなくさまざまな業務にこのKUINSを活用し、利用者である学生、教職員の方々に、より使い易

い便利な図書館サービスを提供していくことが必

要となっています。

「維新資料展—屏風・器物・額—」開催される

附属図書館では平成元年11月2日から12月9日までの期間、本館展示ホールにおいて秋期展示会「維新資料展—屏風・器物・額—」を開催しました。附属図書館で所蔵しています維新関係の資料は、その多くが品川弥二郎（1843～1900年）長州出身、明治時代の政治家。吉田松陰に学び尊攘倒幕運動に参加、松方正義内閣では内相を務めた。）が創設した尊攘堂旧蔵の収集品をまとめた「維新特別資料文庫」にあります。書籍のほか、屏風・掛

軸・帖・巻物・額・器物が含まれています。今回の展示会ではこれまで一堂に展示される機会の少なかった屏風・器物の全所蔵品とこれらと関係の深い額を展示しました。観覧者は総数1502名を数えこれまでになく盛況でした。今後も京都大学で所蔵する貴重な資料の展示会を予定していますので、その機会に出来るだけ多くの方々に鑑賞していただきたく思います。

平成元年度大学図書館職員長期研修に参加して

化学研究所図書掛長 小 菅 敏 明

7月24日から8月11日までの3週間の間図書館情報大学を中心に講義、実習、見学が行なわれた。参加者は、北は北海道から南は九州沖縄まで総勢41名で、その内訳は国立が34名、公立が2名、私立5名であった。

この研修会の目的は研修実施要項に「大学における教育・研究活動の急速な進展に伴い、学術情報の迅速かつ的確な提供が重要となっており、大学の中核的な情報資料センターとしての大学図書館が果たす役割は、ますます増大している。このため係長を中心とする中堅職員に対し、学術情報に関する最新の知識を教授し、職員の資質と能力の向上を図ることにより、大学図書館の情報提供サービス体制を充実する」とあるように、文部省の大学図書館政策の一環としての研修、即ち、これからの大学図書館のあり方、進むべき道を提示したものと思われる。研修は、この目的にそって、
1. 総論 2. 学術情報の流通とネットワーク活動 3. 資料の整備と相互協力 4. 学術情報セ

ンターの活動と大学図書館業務のシステム化

5. 二次情報データベースの形成と利用 6. 情報検索サービス 7. その他 以上7つの分野にわたって講義が行われ、これに加えて、機関の見学、最後に協同研究討議にて締め括られた。

この研修を終えて、私の頭の中の90%をしめたものがある。それは、情報化時代における大学図書館の対応が問われる時代になり、最近多くのところでコンピュータが導入されて来つつある。しかし、まだまだ問題が多くのかさされている。例えば、目録検索システムのものにしばっても、利用者が誰でもすぐ使えるシステムが導入されていないこと、データベース不足（過去のデータが入力されていない）のため、利用者は端末による検索とカード目録による検索をしなければならないなどの問題がある。

端末による目録検索は、果たして利用者にとって最良の検索システムなのであろうか。それは従来のカード目録検索ならば、探しているその情報

のみでなく、同時にその周辺の関連事項も見ることができた。しかし、端末検索ではその情報しか見ることができない。これは研究者にとって大きなマイナスではないだろうか。その他利用者側から、耳に入ったこと述べておく。

1. コンピュータ導入をし、今までのカード目録検索より不便になってはいないか？
2. 基本として、何処の場所（例えば研究室）からでも検索できる、OPACシステムの導入が早急に実現できないのか？

これは、ほんの一部分の意見にすぎない。そこでわれわれは何をすべきなのであろう。利用者に対してアンケート調査等の手段を使い意見を聞き、それを取入れ、利用者にとって最良のシステムを導入することを、目標にしなければならない。その目標ポイントは何か。それは、目録操作が簡単で検索を進めて行く中での Step-by-step の指示及び利用者の能力に応じた検索法（メニュー方式・コマンド方式など）の用意をする。また、書誌レコードの多様なディスプレイ・フォーマットの用意をし、目次などの書誌レコードへの追加とそれからのアクセスポイントの作成オンライン目録における貸出情報の提供を含む所在情報提供等々の機能を、オンライン目録は備えていてこそ、利用者の希望のものに一步近づくのではないか。

われわれ、図書館職員にとって導入のプラス面はあるのであろうか。このことについては、研修における、ある事例をここにあげてみよう。コンピュータ導入前は、1万5千冊の図書の滞貨があ

ったが、導入1年後においては、図書館職員が納品されてくる図書を、ただちに処理できる状態にあるとの報告があった。軌道に乗れば、図書館職員の仕事量の省力化にはなるであろう。しかし、ここで考えなければならないのは、図書館職員の仕事を電算化するということは、ユーザーに対してよりよいサービスをするためであって、けっして、図書館職員だけが満足するような電算化にはならない。

電算化が進歩するにつれて図書館職員の専門性というものが、失われていくのではないか。今までなら情報源である図書を1冊1冊考えながら、目録を採っていくのが図書館職員であった。しかし、これからはコンピュータ導入によって、またどんどんパッケージの開発が進むにつれて、何も考えなくてもただ端末に向うことによって、仕事が機械的にすむ状態になると、考えられるからでもある。図書館職員の専門知識がなくても誰でも端末に向えば入力できるようになる。話は極端ではあるが、近い将来そういう時代がくることは、目に見えている。そこで、図書館職員の進むべき道は何かを考えながら、なおより一層努力し、今まで以上のエキスパート（専門家）になるように、勉強していくことがこれからの図書館員の課題ではないか。

最後に、研修において他の大学の方々と横の繋がりが出来たことは、この研修におけるもう一つの目的ではなかったかと思う。

第3回国立大学図書館協議会シンポジウム （西地区）開催される

国立大学図書館協議会は、昭和62年7月に本協議会において設置された「外国出版物購入価格問題調査研究班」の報告の趣旨を周知させ、それらの内容を討議し、外国出版物の購入について国立大学図書館の適切な対応の方法を検討するため、

東西二地区の会場でシンポジウムを開催することとし、西地区については平成元年11月16日（木）から17日（金）の2日間、関西地区大学セミナーハウスを会場として、44大学、48名の出席をえて開催された。

大学図書館は外国出版物の最大の市場にかかわらず、国立大学における外国出版物特有の様々な制約から、国内出版物と比較すると合理的価格設定及び購入手続き等が行われてきたと言い難く、大学が主体的に予定価格算出上の根拠を確立し、従来の契約方法の見直しをする等、外国出版物購入事務の改善を図るとともに、近年における外国為替相場の変動に対する適切な対応が必要とされる。この前提をもとに「外国出版物購入に関する諸問題の改善に向け」以下のサブテーマが検討、討議された。

サブテーマ（１）競争原理の導入と価格問題

一般競争入札に付した外国図書購入契約に関する事例報告及びそれに係る契約事務の検討。

サブテーマ（２）予定価格の算出

外国出版物における予定価格の算出方法ならびに算出結果の分析及び予定価格算出の今後の課題を討議。

サブテーマ（３）価格格差の解消に向けて

（その１）流通経路の改善

外国図書における直接購入の実施経過の報告と、それに係る予定価格算出方法および外国雑誌における並行輸入の促進に関する諸問題を討議。

（その２）出版元定価における差別価格について

海外において起因する不適当な価格設定の問題、いわゆる出版元定価における差別価格の実態について紹介され、不当な価格差別の解消に向け日本国内の対応だけでなく、I F L A等の国際的機関と連携し、今後解決していくことを合意。

今回のシンポジウムは、それぞれのサブテーマに示されている外国出版物がかかえている価格問題、流通経路の改善ならびに差別価格の問題について活発な討議がなされ、実務上参考となるものが多々あった。また、このシンポジウムによりできたネットワークを活用し、今後これら問題を個々の大学で努力し、大学間で情報の交換を行い協力し解決していくことを確認しシンポジウムを閉会した。

「京都大学図書館業務 関係規程集」の刊行

このたび附属図書館では、「京都大学図書館業務関係規程集」1989年版を刊行した。

これは、現行版が1982年に刊行されて以来、相当年数が経過しており、この間に附属図書館の新館への移転や近年の図書館関係業務の大幅な見直しに伴い、関係諸規程も改廃等整備されたものが多く、関係者から改訂版作成の要望があったものである。

この規程集は、1989年5月現在（一部、5月以降のものを含む。）の成文化された学内の関係規程等を、管理、利用、文献複写・図書撮影等の各関係別に分類のうえ収録しており、図書館（室）勤務者の業務の円滑な遂行のためにご活用いただきたいと思っている。

英文図書館利用案内の紹介

外国からの留学生増加にともない附属図書館でも外国人の図書館利用者が急増しています。

このため附属図書館では、留学生のための英文利用案内の改訂版をつくりました。この案内では、図書館のサービス時間、図書・雑誌のほか、施設の配置図を含め業務全体にわたって図書館サービスのアウトラインが一目でわかるように説明してあります。このパンフレットは、最初の利用申込み（ライブラリーカードの交付）と同時に配布できるよう受付カウンターにおいてあります。

なお、附属図書館では、留学生用図書として、日本の歴史、風俗、芸能等日本関係の洋書約300冊を購入しており、観光案内、地図等は一階の参考図書コーナーにまとめてあります。